

クトゥルフ神話
TRPGシナリオ
「人食い屋敷」

ユキ・オトコ

あらすじ

この町には、土御門家という地主一族が存在していた。彼らはこの一帯を保有し、地域の発展に寄与し続けた。

しかし、土御門家の最後の当主が奇妙な遺言を残して失踪した。家の中を捜索した代理人弁護士が地元の役人との立会いで見つけた遺言状には三つのことが記されていた。

「私の屋敷は決して潰さずに丁寧に保管しておくこと。他の土地の権利は全て政府に寄付するが、屋敷の管理維持費は政府が賄うこと」

「私の屋敷を『人食い屋敷』と称して後世に流布してほしい。決して他人が興味本位で侵入しないように」

「屋敷の管理には町と所縁のない人物を雇い、管理と清掃を頼むこと。また過去に派遣された人間を再度遣わしてはならない。」

当時土御門家が保有する財産が莫大だったこともあり、政府はこの条件を受け入れた。それから長い年月（50年以上）が経った。

今や、古ぼけた土御門屋敷は「人食い屋敷」という噂さえ風化して、歴史ある和製洋館として一般公開されることが予定されている。

しかし、その調整として5年前再開した派遣管理人からの連絡が次々と付かなくなった。中には、放心状態のまま体の一部が「綺麗に欠けた」状態で見つかることがあった。

人食い屋敷はただの人除けのための噂のはずだ。

真相を調べるために探索者はこの屋敷を調査することになる。

登場人物

土御門落水（つちみかどらくすい）

土御門家最後の当主。失踪した当時の年齢は80歳。当時にしても相当な高齢者だったがまるで年齢を感じさせない才気あふれる人物だったそう。

辻井巴（つじいともえ）

土御門家の遺言を預かっている法律事務所の現代表。遺言に従い維持管理の公的代理人として定期的に「人食い屋敷」に管理人を送っていたが、現代表を引き継ぐと同時にその世話を打ち切っていた。

扱いに困るこの案件がようやく自身の手元を離れ政府預かりとなることに安堵していたが、そのために再開した管理人の世話で頭を悩ませている。

探索には非協力的。

来居嬰（くりいさくら）

政府から土御門屋敷公開事務の担当を任されている人物。神戸の異人館管理などを10年以上経験しているため、今回の案件も任されている。今回の探索で探索者たちに同行する。

朝倉史郎（あさくらしろう）

この地域と土御門家の歴史をまとめている地元の役人。土御門家のことについては、彼以上に詳しい人物はいない。土御門屋敷の見取り図を持っている。かなりの高齢で、探索は困難である。

舞台

土御門屋敷について

和製洋館の名に恥じない煉瓦造りの洋館。しかし、その中は現代の家屋としての機能を十分果たすものになっている。

「本館」と「離れ」があり、離れとは回廊がつながっている。

門

入り口には豪勢な金具の呼び鈴が『内側』に施されている。

花壇

目星に成功すると、花壇の奥に日時計のようなモニュメントが見える。

大木

とても大きな大木だが、見るからにくたびれている。そろそろ寿命なのかもしれない。

噴水

既に水は流れておらず、ただのモニュメントと化している。噴水のとっぺんは、まるで日時計のように角張っているが、花壇を調べているとその方角が同一でなく、むしろ真逆に見える。

離れ

書斎：多くの蔵書が古ぼけているが、土御門家が繁栄した根拠として「治水」や「地歴」関係の書物が多いことがうかがえる。

机を調べると、土御門家当主が代々引き継いでいるこの地域の地質をまとめた地図が見つかるが、「地質学」で調べること、この地図の情報が明らかに現代のものを凌駕していることがうかがえる。また机の裏にスイッチのようなものを見つけることができる。

倉庫：測量道具や掘削道具・煉瓦が置かれている。倉庫の真ん中には、大きな支柱がある。

一階

台所：台所には煉瓦造りのオーブンの他は、かなり現代的な電化製品がそろっている。2010年製の炊飯器や、IHヒーターなどが用意されている。オーブンの中を光で照らすと、ひっかき傷のような跡が大量についていることがわかる。また一部煉瓦が欠けているところがある。

手洗い：男女別に分かれている。汲み取り式なのか、底は暗くて見通せない。

風呂場：最近まで使われていたことがうかがえる。排水溝を調べると、大量の髪の毛と何かしらの骨を拾うことができる。

大広間：渡り廊下ともつながっている広い部屋。食事などもここで食べることができそう。食器や調度品は見るからに一級品の様相を呈している。

小部屋：ここには、代々管理人を務めた人間の日誌が保管されている。初代より受け継がれた管理地を示している（噴水・花壇・門、そしてアトリエの窓）。

- ・噴水は必ず一度水を通す事。スイッチは書斎の机の裏。
- ・花壇は決して掘り返してはならない。大木も切り落としてはならない。
- ・門の鈴には触れないこと。
- ・アトリエの窓はバルコニーがないので開けないように。

不自然な壁：見取り図には存在しない仕切りがなされている。この壁には星の印がペンキで書かれ、それをつるはしか何かで削った跡がある。また、手が入りそうな穴がある。

二階

寝室1：たんす、ベッド、小デスク、椅子がある。

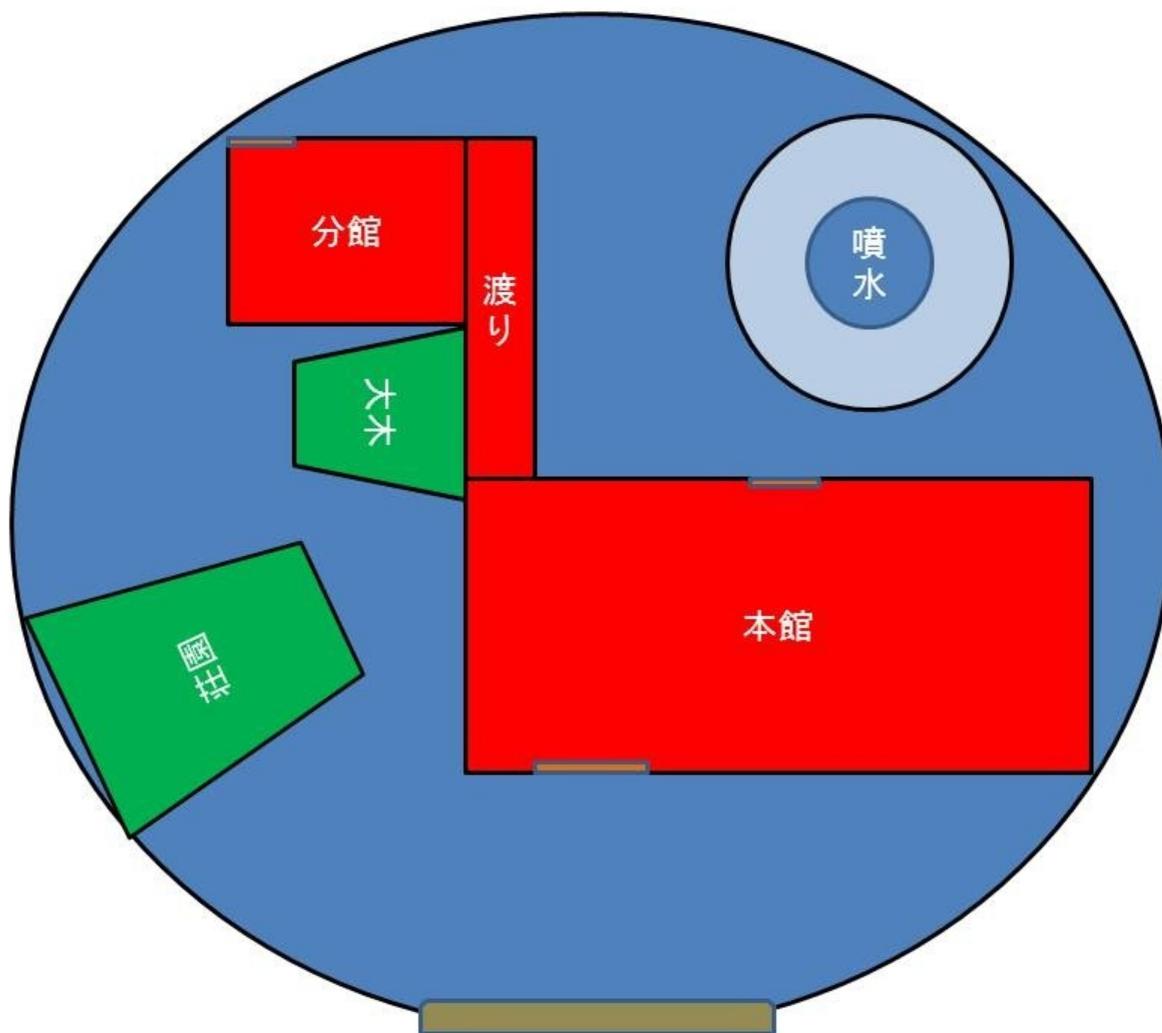
寝室2：部屋全体がまるで強盗にでも遭ったかのようにひっくり返されている。小デスクを除いてすべての調度品が破壊されている。デスクの中を見ると、結界のための布石について書かれた手記が出てくる。デスクをひっくり返すと4つ脚にそれぞれ『旧き印』が描かれていることがわかる。

アトリエ：ここにはなぜか大量の血痕があり、芸術品を見ているとそこかしこに骨や、腐った体の一部が埋め込まれていることがわかる。ちなみに、長時間この場所に滞在（調査二回分相当）していると奇妙な羽音が聞こえ、状況次第で気を失ってしまう。
このアトリエには人が出入りできるくらい大きな窓があり、アトリエに日光を送り込んでいる。

〇〇〇の部屋

この部屋には、巨大な花崗岩と金属製の筒、そして蔓のようなものが配置されている。
詳しくは後述。

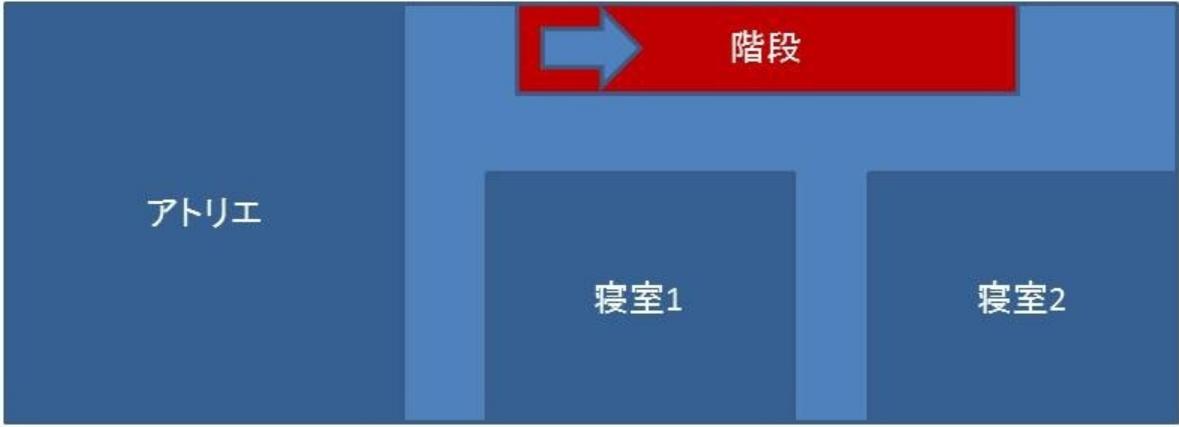
あくまで一例として屋敷の図



土御門家屋敷

土御門家本館構造

2F



1F



土御門家分館構造



あらまし

土御門家は宇宙からの使者をとある人物から紹介されて土地を提供する代わりに治水・土木の知識を得る。

土御門家はその技術と『冒瀆的な力』でこの町の発展に寄与してきた。
死に瀕している村人と交渉し快諾を受けた人物を贄として土地の豊穡を維持してきた。

土御門家が率先して人柱となってきたが、土地の力を借りることなく生活水準が維持できるようになり、最後の当主落水が宇宙からの使者に魔術的な結界を施し、解かれぬように自身を不死身にして封印を守ってきた。

しかし、経年の劣化と弁護士怠慢で結界にひびが入り、何かしらの理由で負の因子を持った何かの仕業で失踪事件が屋敷で頻発するようになった。遺言通りこの屋敷は「人食い屋敷」になっていた。

また、「運良く」生き残った管理人は記憶を操作された上に体を文字通りもぎ取られて屋敷の外に放り出されていた。

探索者たちは、屋敷の中を探索し、土御門家当主の落水を見つけ出し、この屋敷の因縁を解き、不幸な事件が二度と起こることのないよう行動する。

Normalエンド

呪いが解け、無事一般公開が実施される。年に何度か参観に来た人が神隠しに遭遇することになる。

Trueエンド

呪いが解け、また屋敷を蔓延る使者たちをこの地から追放することができれば、土御門家も苦悩から解放されるであろう。

真相

一連の失踪事件は、すべて来居嬰の仕業によるものである。

彼女は、神戸にいるときすでに地下に巢食う宇宙の使者「ミ=ゴ」の存在に気づき、神戸の街の採掘の手伝いを条件に肉体から解放された存在となっていた。

そんな彼女が目をつけたのが、土御門家の土地である。

かの神話生物たちの情報により、この地に同胞が封印されているのではと推測した彼女は、政府と取引し、土御門家屋敷の権限を獲得し、土御門家の管理人を次々と洗脳・尋問・殺害していった。

犠牲者の記憶が不明瞭なのは彼女が使者から人間を操る術を獲得しているため。

犠牲者の一部を帰したのは、事件性を高め、封印解除のための「手入れ」を大々的に実施するため。

しかし、辻井の独断で最後の管理役として探索者たちが向かうことになり、慌てて探索者たちに同行を申し出たのである。

土御門家の秘密

彼らは、元々狩猟民族であったが、偶々山に舞い降りてきた宇宙からの使者と遭遇し、取引を行った。

自分達の土地を担保に、この地の豊穡を約束させたのである。

しかし、使者がその豊穡の神の使者「黒い子山羊」を土御門家に鎮座させてしまう。

土御門家は土地だけでなく死に瀕した人間を贄にこの土地の豊穡を維持することになった。

ここにきて、土御門家は事態の重大さを認識、対抗手段として強力な結界を構築する。

多大な犠牲の果てに、土御門家は屋敷を要石として結界「光と闇の目」を成功させ、尋常ならざる知識を駆使して、その中心を異次元空間に隠すことに成功したのである。

しかし、この仕掛けには欠点があった。

- ・ 屋敷が風化することなく維持されること
- ・ 誰かが異次元空間に留まること

土御門家最後の当主となった落水は、その役目を引き受けるために、遺書を書き、自ら不死の缶詰に入ることを選んだのである。

布石についての手記

二階寝室で発見できるこの手記だが、内容は、土御門家の結界についての記述（詳細は「光と闇の目」参照）と封印が解かれたときの第二策について落水の記述が書かれている。

落水の記述

光と闇の目の封印が解かれたとき、「鈴」を破壊することで封印の残滓と旧き印が結びつき、地面と飛び出た冒涇的な存在が二度とこの地へ足を踏み込まないように第二の結界を構築する。

二階の隠し部屋及びクライマックスの流れ

落水の封印空間。

ここには、黒い子山羊の蔓と封印の核である花崗岩、そして器具の取り付けられた金属の筒（落水）が置かれている。

落水の部屋に来居が同行すると、来居は落水と花崗岩を向けて魔術を唱え始める。

落水は来居の頭部を蔓で吹き飛ばすが、来居の本体はそこではないため、間一髪で呪文が間に合ってしまう。探索者には彼女の呪文が高周波で発せられているため10代の若い人間でなければ耳に聞こえない。何も聞こえない探索者からすると、部屋に入ると同時に蔓が来居の頭を吹き飛ばし、なぜか花崗岩と金属の筒が風化しだすという現象を目の当たりにすることになる。

そうこうしていると探索者たちに機械的な音声で、「鈴を、鈴を壊せ……」という言葉が聞こえる。

君たちは部屋から吹き出す熱風に押されてアトリエに戻ってくるが、屋敷は不穏な空気に覆われていた。

探索者は最後の欠片である『門の鈴』を壊すことができるだろうか。（エンディング分岐）

クトゥルフ神話TRPGシナリオ「人食い屋敷」

<http://p.booklog.jp/book/79190>

著者：ユキ・オトコ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/cthulhutrpg/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/79190>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/79190>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ